

### 大阪府職員演劇研究会 『劇団せすん』公演『白い墓』

大阪府職員演劇研究会は、今回のお芝居から公演の時だけ使用する劇団名で舞台を作ることになりました。その名は『劇団せすん』です。いろは四十七文字から「せす」をいただき、お芝居のいろはを極めたいという思いで名付けました。今後ともよろしくお願ひいたします。さて、今回の作品は、高堂要作の『白い墓』です。

太平洋戦争当時、日本軍はアメリカ軍捕虜を生体解剖に附して死亡させます。この解剖に携った医師は戦犯として問われ軍事裁判で絞首刑が宣告されます。昭和史最大のタブーといわれた実話をモチーフにしたお芝居です。自分の国が軍事国家へと突き進んでいるとき人間は一体何ができるのでしょうか？自分が為した罪の重さ(深さ)人が人を裁くことの意味、人によって裁かれることへの慄き、憲法9条や平和を考えるきっかけにでもなればという思いでこの作品に挑戦しました。是非お越しください。

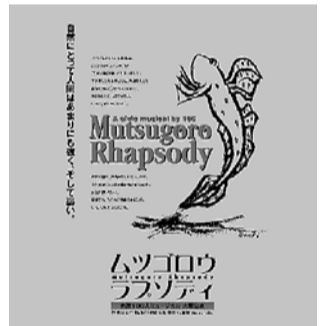


日 時 5月22日(金) 19:00~  
23日(土) 13:00~  
18:00~  
24日(日) 13:00~  
場 所 青少年会館  
プラネットホール  
チケッ ト 一般 2000円  
65歳以上 1500円

お問い合わせ等は、三島府税務所の杉田又はなにわ西府税務所の秋田までお願いいたします。

### 大阪・憲法ミュージカル2009 ムツゴロウ・ラブソディ 「地球はヒトのものじゃない、ヒトは地球のものなのだ...」

大阪の若手弁護士さん40名の呼びかけで、「大阪・憲法ミュージカル2009」が動き出しました。4才~70歳代までの市民130人がプロの指導のもと練習に励んでいます。演出家田中嶋さんの手がける今回のミュージカルは、長崎県の諫早干拓事業を題材に豊かな自然の恵みのすばらしさとそれが失われることの悲劇をムツゴロウなどの動物たちによる寓話劇という形で表現します。人間が自然と共に生きる大切さを、もう一度思い出してみよう...



お問い合わせ等は、岸和田保健所の荒崎又は公衆衛生研究所の宮野までお願いいたします。

#### 公演日程

6月20日(土) 厚生年金会館芸術ホール(大阪市)  
昼の部(開場12:30・開演13:30)  
夜の部(開場17:00・開演18:00)  
6月21日(日) メイシアター(吹田市)(開場16:00・開演17:00)  
7月4日(土) 高槻現代劇場(高槻市)(開場17:00・開演18:00)  
7月5日(日) プリズムホール(八尾市)(開場17:00・開演18:00)  
7月12日(日) ラブリーホール(河内長野市)  
(開場14:30・開演15:30)  
(一般2500円、高大学生2000円、中学生以下・障がい者1500円)  
※当日券は+500円

## 死ぬか生きるかまで追い詰められた労働者

### 「蟹工船」21世紀丸」物語

9

府税支部なにわ東分会 小山 国治

「本当のこと言えば、そんな先の成算なんて、どうでもいいんだ。死ぬか、生きるか、だからな」

「蟹工船」の労働者たちが二度目のストライキに立ち上がることを予感させる最後の場面のセリフだ。

2月1日号で「年越し派遣村」について触れたが、まさに、「死ぬか、生きるか」の問題だった。すでに雑誌や単行本で、「派遣村」の発行委員各氏の体験が発表されているが、想像以上に深刻な事態にあることが明らかになっている。

日新聞社で、その実態の一部を次のように語る。「村民が増え続けた4日には、受診者が一〇人を超えた」そして、人々を救うために、体だけでなく、心を蝕めた人も多かった。ネクタイ姿で村に来た男性は、仕事を切られたばかり

まさに派遣村にたどり着いた人の中には、命がらにたどり着いた人がいる。自殺を試みて保護された警察官に連れ添われて来た人、ハローワークから引き返されて来た人、「あつことか、生活保護の担当部署である福

「年越し派遣村」の目的は命をつなぐことだ。と語る東海林智毎日新聞記者は、『派遣村』を動かした6日間、毎

社事務所すら、「あそこに行けば何とかなる」といつて派遣村に人を回してきまされた」と湯浅誠氏は『派遣村』が問われているか(岩波書店)で憤りをこめて告発している。

ところが、大阪府の戦略本部会議で、副知事が「公務員組織は民間と違い、職員を強制的に辞めさせることはできない」と発言。民間の違法行為を当然視するかのようなど問題発言だ。民間では「首切り」当たり前などという行政トップ級の認

識を絶対に許してはならない。行政が責任を果たさない現実、企業の無法が横行しているといつても過言ではないだろう。そんな中、多くの人が声をあげ、立ち上がった。次回からはそんな闘いも紹介したい。



年越し派遣村の発行委員らの実体験を掲載した本

## 児童福祉の現状 33

健康福祉支部相談所分會書記長 神夏磯 保

使って話すこととともに少年が社会的に役に立つ存在として自己肯定感を育てるよう支援メニューを工夫するようになっています。

私が記事の連載によって役に立っているという自己肯定感を持つようには少年も役に立つ存在としての自己肯定感を少しずつでも確認していければいいと思います。

非行という表出から卒業できると思っています。この事は、人に共通のテーマだと思いますが、特に非行少年の関わりでは

わかっていくのが重要ですが、不登校状態の少年・弟の得意分野に着目し、家の近くの公園で野球をいっしょにすることからスタートしました。放任で食事も充分摂取できていないという情報とは裏腹に、野球ノックでは素早い軽快な動きにビックリしました。自然とほめ言葉がでます。

何回かの家庭訪問後、職員が迎えに行つての通所、自ら自転車を通所、と段々ステップアップしていきました。

当初警戒的であった母親も、いっしょに行事に参加する姿が見られたりしました。

## 「この世にうまれてよかった」といふ充実感

大事にしていききたいと思っています。

ある少年の事例を紹介いたします。母親の入院によって、弟とともに一時保護されましたが、退院と同時に母子の希望で家庭引取りとなりました。学校は、ネグレクト(放任)家庭として引取りに反対しました。ケース会議を開催し、施設入所が必要と主張する学校に当センターの方針を話し、引取り後の家庭支援を開始しました。この家庭に、どういふメニューで当初関

この少年への関わりは、約2年続きましたが、担当者丁寧に関わり、その中で、少年が自らの道を選択し、この世に生まれて良かったといふ充実感を少しずつ持ちえていった表情が読み取れました。

このような粘り強い、地道な支援が必要ですが、現状の子どもの家庭センターは、先進国の専門機関の人が「クレージー」と驚嘆するほど、一人が抱える件数が過重です。施設の現状も含め、児童福祉部門が、先進国と言われるに相応しい体制となるように声を大にして訴え続けなければと思